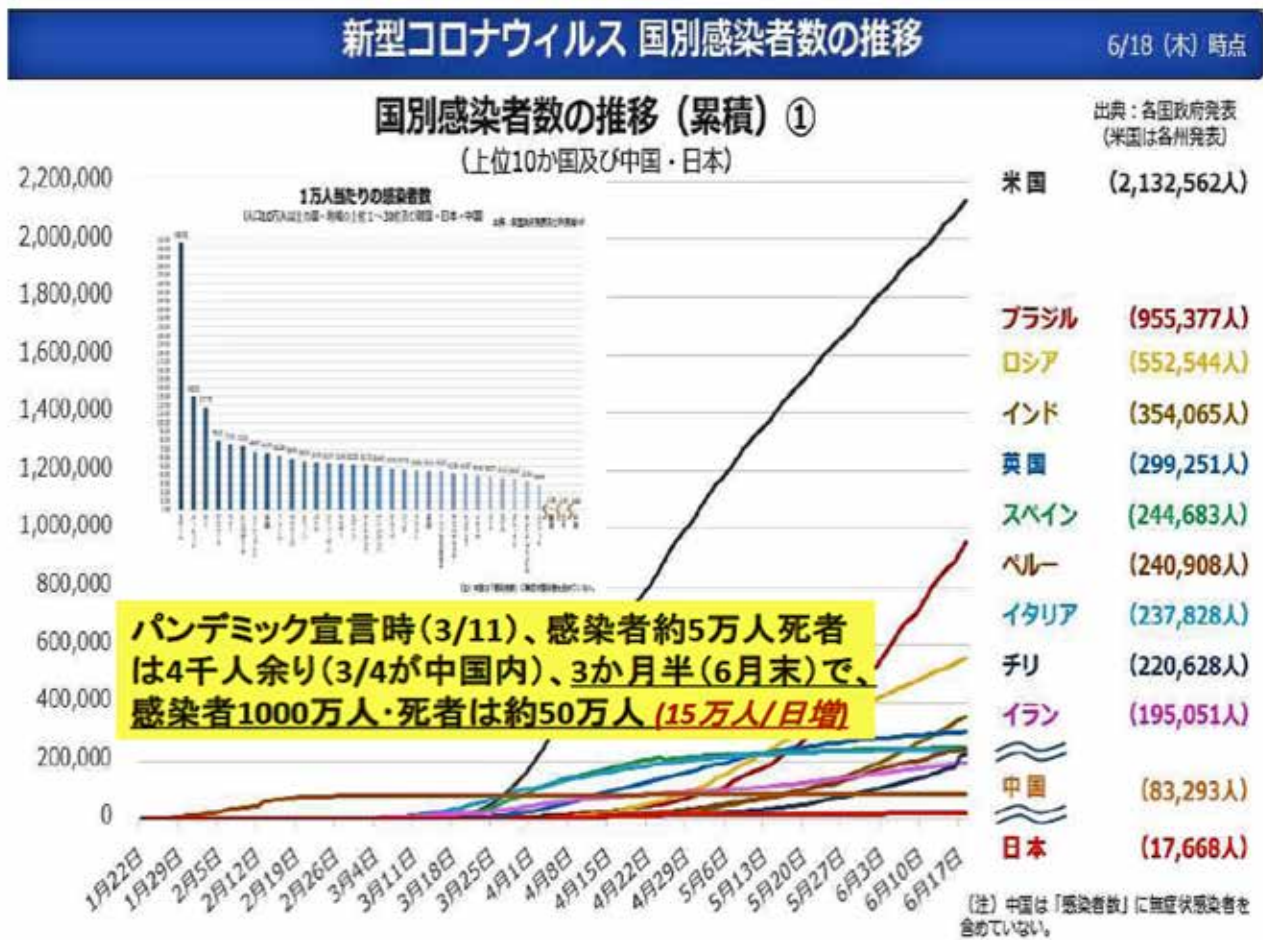


はじめに

世界は未曾有の新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) のパンデミック (世界的感染拡大) にみまわれている。世界保健機関 (WHO) がパンデミックと認定した3月11日時点では、感染者数が約5万人で死者数が4千人余り、その約4分の3は中国国内であった (武漢市の封鎖は1月23日)。それが6月末で感染者は1000万人、死者が50万人となり、今後どこまで拡大するか想像しがたい状況である (米ジョンズ・ホプキンス大学システム科学工学センター集計)。わずか6か月ほどで、このような事態がアツという間に出現することは大方の予想を超えた出来事である。事態の推移は、現在進行中で予断を許さないが、この度の危機の深刻さは人間社会を様々な側面から大きく揺るがす極めて奥深いものである。

だが徴候的には、新型インフルエンザ (1918年スペインかぜを筆頭に何度も流行)、エボラ出血熱 (1976年)、エイズ (後天性免疫不全症候群・HIV、1981年)、SARS (重症急性呼吸器症候群、2003年)、MERS (中東呼吸器症候群、2012年)、鳥インフルエンザ (2013年) などが起きており、新型・新興感染症の出現は警戒されてきた。とくに新興感染症の多くが動物由来感染症であり、今回の新型コロナ感染症 (COVID-19、ウイルス名はSARSに近いとしてSARS-CoV-2) の起源としてコウモリやセンザンコウ經由などが疑われている。

図1 (世界の感染者の推移、外務省HPより、一部加筆)



① 人と感染症との長い関わり

もともと人類の歴史は、長らく感染症との戦いの歴史であった。その過程では、動物由来の感染症との長い付き合いがあり、文化・風習の形成や、人間集団の勢力圏の攻防において大きな影響を与えてきた。近代以降、急激な人口増加における人類の大繁栄は、栄養改善とともに公衆衛生や抗生物質の利用による感染症の克服が大きく貢献した。それはこの2百年余りでの出来事であり、ワクチン開発が1798年、細菌の発見が1876年、ウイルスの発見が1898年（電子顕微鏡による実物確認は1932年）、抗生物質の発見が1928年であった。こうした近代医療の発展と普及が大きな効果を発揮したことで、一時期には人間は感染症との戦いに勝利したとの楽観論も現れた。だが、最近はその楽観論は影をひそめた。それどころか、抗生物質への耐性菌問題とともに、次々に出現し変異する感染ウイルスの脅威を前にして、ウイルスの反乱、ウイルスとの戦い、人類の天敵ウイルスなどの言説が生まれ、恐怖心や敵視する風潮も出始めている。

他方、新たな感染症の出現は、人間自身が問題を深刻化させてきた側面も指摘されている。たとえば「感染症が多発する原因の第一に、人間による自然破壊を挙げなければならない」（石2014,2018）などの指摘がある。大規模な自然破壊での生息地を失った野生動物が病原体を拡散する事態や、従来は隔たりを維持してきた野生の自然への大幅な介入が誘因となったとの指摘である。また近年の野生生物の商業的取引・利用の拡大（ペット、薬用他）も引き金になっている懸念から、自然保護団体からの規制強化を求める動きが活発化している。最近では、野生生物への過度な危険視や排除（駆除）の動きも生じてきた。これらの動きは、人間と感染症、細菌やウイルスとの関係を狭い利害関係や敵対的關係でのみとらえる傾向をもつ。だが、他方ではより根源的に状況をとらえ直して、従来の生命・自然観を問い直す視点も新たに生まれている。

それは従来の狭い人間中心主義に対する問い直しである。それは近年さまざま視点から提起されており、たとえば腸内細菌（腸内フローラ）をはじめ土壌や海洋の無数の微生物たちが想像

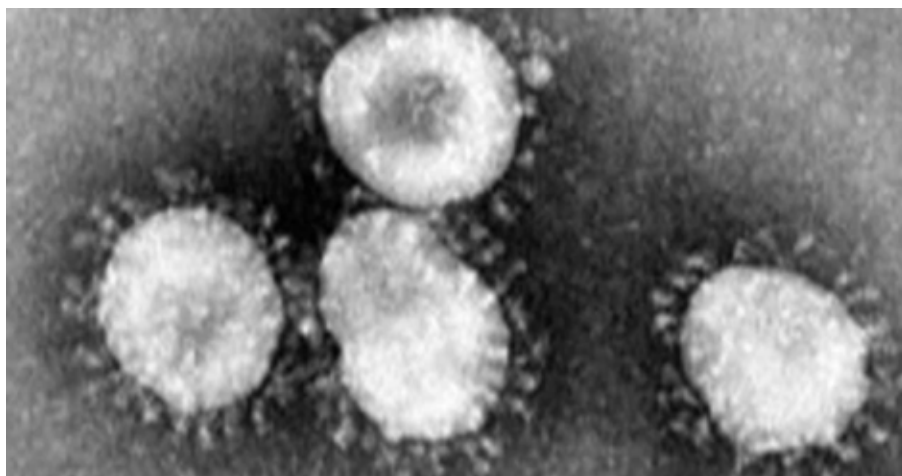
以上の巨大な世界を構成していることへの再認識である。これはコペルニクス的世界観の変革（パラダイム・チェンジ）とでも言うべき動きである。例えば人間を構成する細胞数の約37兆個に対して、体内・体表面には約100兆個もの細菌や菌類が住み着いており、複雑な共生・共存・対抗関係の中で私たちはバランスを保っている存在ではないかとの認識である。海の中でも海洋生物の全体の半分以上9割近くを微生物が占めているという（ブレイザー 2015、モントゴメリー 2016）。

② 病魔と見る視点から共生・健康概念の拡張へ

自己増殖できない超微細なウイルスに関しては未知なことが多いが、その不可思議さとともに巧妙な働きが近年徐々に明らかにされつつある。その量的な試算での興味深い指摘としては、「海のウイルス全体に含まれる炭素の量は2億トン、シロナガスクジラ7500万頭に相当する膨大なものになる。仮にウイルスをつなげると、全体の長さは1000万年光年になる」というのである（山内2006）。

ウイルスの起源や働きに関しては研究が活発化しており、微生物から大型生物まで種の壁をこえて遺伝子を伝搬させる働き（遺伝子の水平伝搬）があること、その働きに注目してウイルス進化説まで登場するなど、不可思議な働きをめぐる議論が続いている。ウイルス感染で進化が起きるののではないかとの実例としては、哺乳類が胎盤形成を獲得した過程でウイルス感染が関与していた事例が明らかにされている。さらに真核生物の誕生・進化に巨大ウイルスが関与していた可能性も指摘されており、議論は尽きないのが今日の状況である（武村2017）。

まさに生物多様性の土台を形作る根源的な姿が、超微細な細菌類や生物モドキと言わなければならないウイルスの世界として広大に広がっているのである。お釈迦様の手の内で暴れまわる孫悟空の寓話が示唆するように、人間という存在が、いかに小さな存在かを改めて再認識させられる。生物界の分類・系統樹を見てもわかるが、大半は微細な生き物たちが占めている。それらのほんの端っこに、私たち動植物が位置している。地

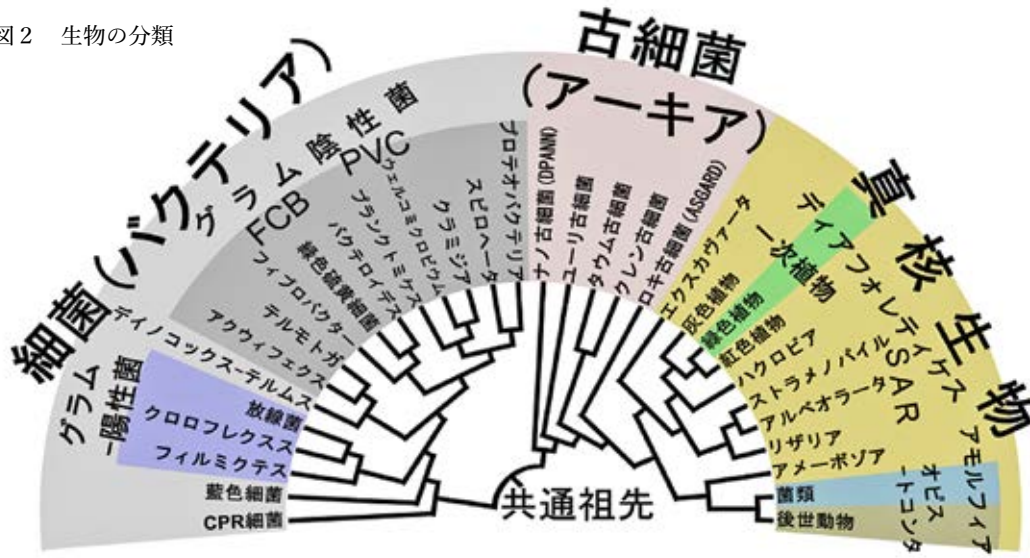


伝染性気管支炎ウイルスの電子顕微鏡写真

：出典ウキペディア

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AA%E3%83%AB%E3%83%88%E3%82%B3%E3%83%AD%E3%83%8A%E3%82%A6%E3%82%A4%E3%83%AB%E3%82%B9%E4%BA%9C%E7%A7%91>

図2 生物の分類



地球上での生物誕生は約38億年前と考えられているが、多細胞生物の出現と発展は約6億年前頃からであり、現存の哺乳類の出現は約5～6千万年前でしかない。悠久の生物進化のドラマにおいては、私たち人間の認識レベルを超えた広大なダイナミズムが内在してきたこと、こうした認識をもつことは、人間存在を支えている土台を見直すことであり、世界認識について新たな視野をを私たちに提示してくれる(山内2018)。

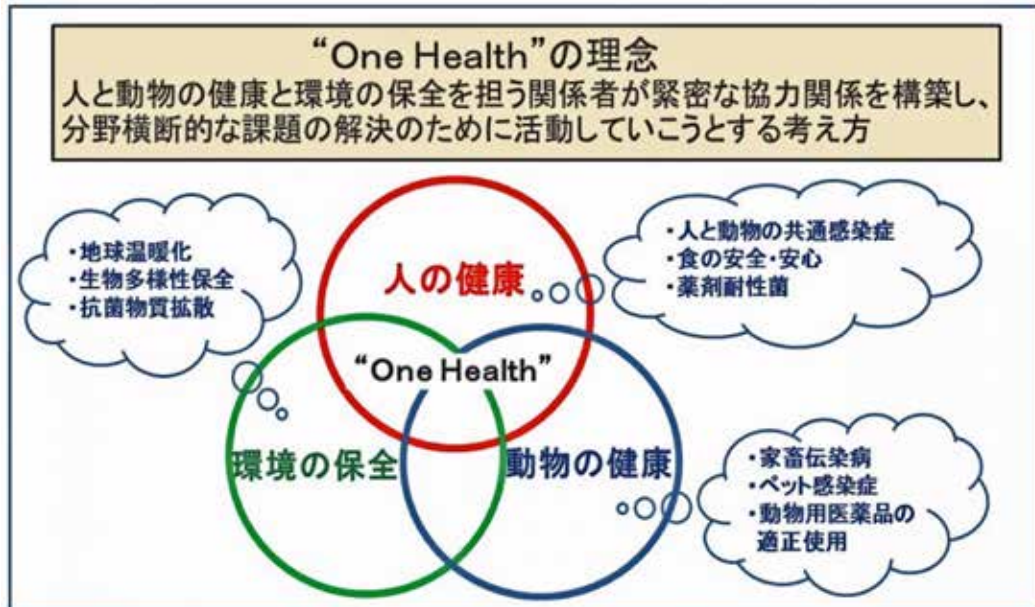
実際のウイルス感染で甚大な被害を生じる事態への対処としては、人類の英知を結集して取り組まねばならない。その視点は、人間世界の立場として当然のことである。そうした対処を前提としつつも、一歩さがってウイルス危機の事態をどう受けとめるかについては、私たちの存在の底層部分(悠久の世界)において新たな視点を獲得する契機になり得るものである。人間存在に関し、従来の枠組み(世界観)を超えた生命観や自然に対するより深い認識をもつことで、未来を生きるための新たな世界観への道が開かれる。それは危機に対する向き合い方への土台の再構築であり、私たちを次なる地平へと導くための新視点となるかもしれない。

③ 「ワンヘルス」から「プラネタリーヘルス」へ

その際の巨視的な視点としては、自然・人間関係への根底的な見直しが重要だと思われる。新型コロナは氷山の一角として現れた現象であり、各種の新興感染症の増大(とくに人獣共通感染症)の背後には、人間活動の甚大な影響がある。自然・人間関係の視点として考えたとき、私たちは今や「健康」の考え方への大幅な拡張が迫られているのではなかろうか。実際、21世紀に入ってまもなく、野生生物・家畜(ペットを含む)・人間の「健康」が互いに連鎖しているとの視点が生まれており、総合的に観る考え方として「ワンヘルス」概念が提示されている(2004年、マンハッタン原則)。さらに、最近は地球システムを健康という視点でとらえ直す「プラネタリーヘルス」の概念も提唱されている(2014年、The Lancet ジャーナル)。

詳細は省くが、「身土不二」(私の身体と大地は一体である)の思想とも共通する考えであり、自然と人間の相互作用への新たな視座の再構築でもある。病気への治療薬やワクチン対応などの対症療法のみならず、環境調和型の社会・発展様式の組み立て直し(根本的対処)として重要な考え方である。

図3 ワンヘルスの理念



(イメージ図の出所: 福岡県生活衛生課HP)

コロナ危機において、私たちは大きな岐路に立っている。危機を契機に、諸矛盾がより深刻化して悪循環的な事態に陥るのか、諸矛盾への根本的な対処として変革に向かうチャンスになるかの岐路である。それは欧州で提起されだしたコロナ後を見据えたグリーン・リカバリー（持続可能な社会形成）の実現であり、リスク多発の時代へ根本的な対処の動きである。

④ ポストコロナ、新時代の転機となるか？

今回の新型コロナウイルスは、現代のグローバル社会にまさしく適合（フィット）して直撃し、猛威をふるっている。それは、急拡大するグローバル化への警鐘でもあり、従来の発展のあり方に質的転換ないし構造変革を迫る出来事である。近年、同時多発テロ（2001年）、リーマンショック（世界金融危機、2008年）、東日本大震災と原発事故（2011年）、多発する自然災害（気候変動関連）、そして今回のコロナ危機など、グローバル危機と呼ぶべき事態が続発している。各出来事は背景や性格は異なるが、現代世界の発展様式に深く根差した矛盾への発現・警鐘として見る事ができる。

とくにコロナ危機が明らかにしたことは、従来の経済発展のあり方への問い直しである。この危機の基大さは今後の行方にかかっているが、リーマンショック（2008年）をこえて1930年代の大恐慌に匹敵するとの懸念も出されている。問い直しの視点とは、これまでの世界が経済利益と効率中心に都市化が加速され、グローバルな世界都市の形成を頂点に周辺地域が「中心一周辺」的に編成されてきた世界に対する批判的視座である。詳細は省くが、一極集中、無限成長・拡大システムから、分権・自立システムへの軌道修正（脱巨大都市化）や、個人主義的な物的消費による拡大・膨張経済から、適正規模のコミュニティ経済へ、利己・自己中心から社会配慮・公正や協働的価値の重視へ、といった発展様式への問い直しが起きている。

地域のあり方としては、農山漁村が大都市に從属するのではなく、里山・里海ルネッサンス的な展開方向、自立・分権・コミュニティ重視の「グローバル」社会の形成、産業構造としては、第1次産業を基本におく多元的価値を実現する自然共生社会の見直しへの契機となり得るかが問われている（古沢2020）。

人類の発展を近代化プロセスとして捉えた場合、第1次産業は遅れた産業もしくは衰退し縮小していく産業としてイメージされてきた。第1次産業から第2次、そして第3次産業へとシフトしていく産業発展のパターンが、近代化プロセスとされてきたからである。イメージ的には、大地からの離脱、泥臭い世界との決別と言ってもよい。その結果、私たちは各種公害や地球環境問題に至るまで、自然からのしっぺ返しを受けているのではなからうか。世界的に巨大都市への

一極集中が進み、地域と風土に根付いてきたカルチャーとしての諸文化が消えつつある。社会・文化の多様性のみならず土台である自然の多様性（生態系・種・遺伝子）までも消し去ってきたのが、グローバル化の今日的状況である。

コロナ危機は、まさしく都市一極集中化するグローバル現代世界への直撃であり警鐘である。この警鐘に応えるべく、私たちは化石燃料などの地下資源の大量消費で成り立つ巨大都市に象徴される産業社会（グローバル・テクノトピア）から転換ができるだろうか。そしてさらに、自然資本を再評価する第1次産業の再構築（再生資源・エネルギー利用、生命系産業としての6次産業化など）、まさに里山・里海ルネッサンス（グリーン・ニューディール）時代へと大きくかじ取りしていく方向転換を実現できるだろうか。いま、私たちは時代の岐路に立たされている。

参考文献

- ・石弘之『感染症の世界史』洋泉社刊、2014年。角川ソフィア文庫版、2018年。
- ・武村政春『生物はウイルスが進化させた 巨大ウイルスが語る新たな生命像』講談社（ブルーバックス）2017年。
- ・デイビッド・モントゴメリー、アン・ピクレー片岡夏実訳『土と内臓 微生物がつくる世界』築地書館、2016年。
- ・古沢広祐『食・農・環境とSDGs ー持続可能な社会のトータルビジョン』農山漁村文化協会、2020年。同「逆転した産業ピラミッドを正し、第1次産業を基本とした自然共生社会へ」『新型コロナ19氏の意見』農文協ブックレット、農山漁村文化協会、2020年。
- ・古沢広祐「コロナ危機が問う自然・人間・文明」『総合人間学研究』第14号、2020年。同「『総合人間学』構築のために（試論・その1）ー自然界における人間存在の位置づけ」、『総合人間学研究』第12号、2018年。
学会誌はネット公開中：http://synthetic-anthropology.org/?page_id=334
- ・マーティン・J・ブレイザー、山本太郎訳『失われてゆく、我々の内なる細菌』みすず書房、2015年。
- ・山内一也『ウイルスの意味論 ー生命の定義を超えた存在』みすず書房、2018年。